

## 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第12巻 人生と学問

著者	八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ
ページ	137-137
発行年	2011-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4896">http://hdl.handle.net/10502/4896</a>

## 人生と学問



梅棹はいう。「人生にあらかじめ決まった目的というものはあり得ない。生きるということは、別に目的があつて、意志を持って生きてきたわけではない。しかたなく生きている」。確かに、人は自分の意志で生まれてきたのではないし、自死でもしない限り、自分の終わりさえ決定できない。だからその間、何で目的を持って生きる必要があるか。

学問も、実目的には何の役にもたないという。無為無能であつていい。

ところが実際には、強烈な目的意識がいたる所にみられる。山登りがそうであろうし、民博の創設だって、用意周到な戦略がなければなされ得なかつた。役立たないというが、数々の著作や民博の存在は、我々をどんなに豊かにしてくれたことか。

梅棹はシャイで、人見知りする。しかしおしゃべり好きで、著作目録が示すように自己顕示欲も旺盛である。

梅棹は形式ばつたことが嫌いで、「べき」とか「努力」など、自分の辞書にはないという。しかし服装など常識的なことを重んじ、学者としてすべきことなどを書き残している。

こうした一見相矛盾する言動は、梅棹の中の調和した多様性から生まれる。それは総合力の源であつた。たぐいまれな才があつてこそだが、着眼点の鋭さや時代を切り開いた思索も、そうしたところに由来していい。

梅棹の根底には、自分がいようがいまが世の中は動いていくという、人生に対する虚無感があつた。用なしという認識があつたからこそ、バランスのある思索ができたのである。失明にも耐え得たのだ。

古来人の世に大功をなし、人類に貢献した人は、自由なる意志を発揮した人である。「智者は常に憂を懐いて獄中の囚に似たるが如し」ということばがあるが、いつも憂いを心の底に抱き、自由なる意志をもって、人間を大成した梅棹は、まさに現代最高の智者であつた。(八杉佳穂)